



空襲後の高知市の様子(提供:高知市教育委員会)

その後、有澤さんは南高市の国分に住む叔母のもとへ疎開。配給される食料では足りず、皆が皆、貧しい状態だったといえます。とり

終戦後は高知市榊形で文房具屋を営んでいた祖母の家に身を寄せます。終戦したからといって、すぐに食料不足は解消されませんし、建物やまちが復興するわけでもありません。

終戦はすぐには平和をもたらしてくれない

わけ記憶に残っているのは、お風呂代わりに入っていた川で見た光景だそうです。川の側には畑があり、そこに若い兵士がふらふらと近寄ってきました。「ナスを分けてもらえませんか」と言うと、兵士は二つほどもぎつてその場でかじり始めました。見るからに痩せていてふらふらとした姿に有澤さんは「兵隊さんがこんな状態なんて、日本はきっと勝てないんだ」と子どもながらに思ったそうです。そんな出来事から数カ月も経たないうちに終戦を迎えます。

隠し、空襲をやり過ぎました。全員で生き残る事ができたのです。家に戻ると、有澤さんの家は焼けて無くなっており、近所の家もほとんどが跡形もなく消えてしまっていました。一面、野になつたようだったそうです。

どこの人も食べるものがない状態で、お米は一粒も食べられません。代わりにかぼちゃを毎食炊いて食べ、それを続けるうち、身体全体が心なしか黄色くなつていったといいます。また、戦地から戻った人には心を病んでしまった人も少なくなかったといえます。

今、とっても幸せ

戦争は最中にさまざまなきな被害を生むだけでなく、その後も長く人々をむしばみ続けていくのです。

当初、この体験を応募するかどうかとても迷ったという有澤さん。しかし自分の年齢を考えるといつどうなるか分からないし、戦争は絶対に二度と起こしてほしくないという思いから応募してくれたそう。

「自然災害はどうしようもないけれど、戦争は人間が起すもの。何万人という人が死んでしまう。そこに良い人も悪い人もないんです。みんな無差別に死んでいく。家も財産も食べるものも全部なくなる。だから、どんなことがあっても争いをしてはいけない。」

「苦しい時代を乗り越えて、何もかも整えさせていた。結婚して主人には誰にも負けないほど愛されながら一緒に生きられた。今が幸せの絶頂なんです。幸せいっぱい。そんな今があるから、二度とあんな思いをしたくないし、誰にもあんな思いをしてほしくない。」



たくさん旅行に行ったという有澤さん夫妻

写真が好きだったという有澤さんの夫自宅にはたくさんのアルバムにぎっしりと写真が



戦争を体験した人は少なくなくなっているけれど、していない人がいるからこそ、戦争の無差別さを知ってほしい。続けて、戦争のない現代についても語ってくれました。「私、今がとっても幸せなの。切々と語っていた顔とは裏腹にばつと明るい笑顔を見せられました。」

有澤さんが言うように、誰しも守りたい平和があるのではないのでしょうか。それは、毎日のご飯や、家族と過ごすこと、趣味の時間など人によってさまざまだと思います。知ること、忘れないこと、長くこの平和が続くよう願うばかりです。

戦争特集



終戦から78年。本年の戦争特集は、今後の変わらぬ平和を願い、広報編集部へ寄せられた二つの戦争にまつわるエピソードをお届けします。

エピソードを寄せてくれた西山さん(左)と有澤さん(右)

戦争追憶記その1

戦争は人をむしばむ 人による災害

家族で逃げた 高知空襲

ありさわのりこ 有澤典子さん(野市町)

1945年1月、高知市神田地区への爆弾投下を皮切りに高知県は度々空襲に見舞われました。特に

オーツという音に包まれていて、火のついた焼夷弾が空にぱいに広がっていました。昼間の空襲でしたが、燃えながら降ってくる焼夷弾は無数の星のように見えたそうです。

この時のことは有澤さんにとって一番の恐ろしい出来事だったといえます。どうしても忘れられず、恐怖で走ることしかできなかったと語ってくれました。

同年6・7月は頻繁に空襲があり、来襲した戦闘機の低く唸るような音や、けたたましい空襲警報も珍しいものではなかったといえます。今回エピソードを寄せてくれた有澤さんは当時8歳で、高知市新屋敷に住んでいました。空襲警報が聞こえ、その日も母・兄・弟と万々の山を目指して逃げたそうです。

万々を目指して逃げる中、有澤さんはゴオゴオという音が近づくのを感じました。戦闘機が来たのだと分かり、慌てて道と田んぼの間にあつた溝に家族全員で身をかがめて隠れました。どんどん近づく戦闘機の音。次の瞬間には死んでいくかもしれないと、生きた心地がしなかったといえます。

「お嬢さんの下駄、燃えてるぞ」と言われました。火消しのために地面でこすって、裏返すとぼうっとした青い炎がまだ下駄にこびりついていました。焼夷弾や爆弾の被害がそれだけ甚大だったことが分かります。それでも一家は山に身を